

アイルランド文学ルネサンスとジェイムズ・ ジョイス(1)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

64

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

36

(発行年 / Year)

2012-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007767>

アイルランド文学ルネサンスと ジェイムズ・ジョイス(1)

結 城 英 雄

ジェイムズ・ジョイスの文学は、W.B. イェイツ、ジョン・ミリントン・シング、ジョージ・ムア、あるいはレイディ・グレゴリーといった、アイルランド文学ルネサンスの主要な作家たちとの対立から開始されたと論じられることが多い。事実、ジョイスの一連の作品には、そうした年長の作家たちへの風刺が込められているように思われる。アイルランド側における文学研究においても、トマス・キンセラの『二重の伝統』(1995) やニール・コーコランの『イェイツとジョイス以降 — 現代アイルランド文学を読む』(1997) など、アイルランド文学ルネサンスの中心人物のイェイツと比べ、ジョイスをその対立者と位置づけ賞賛している。またこの対立図式は、最近のジョイス研究においても、レン・プラットの『ジョイスとイギリス系アイルランド人』(1998) やウィラード・ポッツの『ジョイスと二つのアイルランド』(2000) などにおいて、さらに具体的に論じられている。こうした論考の背景にあるのは、イェイツたちとジョイスの出自の相違である。イェイツたちがイギリス系アイルランド人のプロテスタント教徒であったのに対し、ジョイスは土着のカトリック教徒であった。両者の間には屈折した対立が胚胎していたとされる。そして今日のそうしたアイルランド側の研究を支えているのが、ジョイスの世界的な名声の確立とポストコロニアル論の隆盛である⁽¹⁾。

同時に、ジョイスの文学は大陸との関係で論じられることも多い。ジョイスは若くしてアイルランドを脱出し、その後はトリエステ、チューリヒ、パリと大陸の都市を移り住んだ。いずれの作品も祖国アイルランドの都市ダブリンを舞台としながらも、手法やテーマなど大陸の文学の影響が色濃い。文学の地平を徹底的に開拓した、国際的な作家であると賞賛されるのも当然である。ジョイスの作品がモダニズムという時代精神から誕生していることに疑念はない。1905年から1915年に到るまで10年間ほど暮らしたトリエステは、オーストリア＝ハンガリー帝国支配下の他民族・多言語都市であった。また、第一次大戦のために1915年から1919年まで疎開していたチューリヒでは、世界各地から集まった作家や思想家の新しい考えに関心を示した。そして1920年から1940年まで留まったパリでは、様々な領域でモダニズムの運動が展開していた。ジョイスの移り住んだこれらの都市の文学風土が、その創作に影響を与えたことは間違いない。まさしくジョーゼフ・ケリーが『われわれのジョイス — キャストからカノンまで』(1998) で指摘するように、ジョイスはアイルランド人作家としての地位を放擲(キャスト)されながらも、いつしか世界的な作家(カノン)へと変貌していったということになる。

いずれにせよ、ジョイスがアイルランド文学ルネサンスから受けた影響が無視されている。実のところ

ろ、その創作の源泉は同時代のアイルランドにあったのではなかろうか。短篇集『ダブリンの市民』(1914)の着想は、ジョージ・ムアの『未耕地』(1903)の影響によるものだろう。また、自伝的小説『若い芸術家の肖像』(1916)は、ムアの『一青年の告白』(1886)、ならびにジョン・エグリントンの『遺物についての二つのエッセイ』(1894)の個人主義の思想を意識したものであろう。そして『若い芸術家の肖像』と同じくギリシア神話に拠って立つ叙事詩『ユリシーズ』(1922)も、イエイツの神話的手法のみならず、アイルランド文学ルネサンスの作家たちのギリシアの古典文学に対する関心に啓発されていると言えよう。さらに、『フィネガンズ・ウェイク』(1939)の構想も、アイルランド文学が胚胎している言語問題に触発されていると同時に、イエイツの『幻想録』(1925, 1937)とも連動している。ジョイスが若くして大陸の思想を取り込んだとしたら、そのような意識を形成する、脱国家的な文学風土がアイルランドに存在していたと考えるべきである。事実、同時代のほとんどすべての作家が、大陸の文学の動向に敏感に反応していたのである⁽²⁾。ジョイスの文学も、アイルランド文学ルネサンスという制度のなかで誕生したところが大きい。

本稿では、そうしたダブリンの文学事情とジョイスの創作との関係という、これまでのジョイス研究で無視された空白部に着目することにより、ジョイスがどのように自らの文学を定立してきたかを検証するつもりである⁽³⁾。1890年代から1920年代にかけて、アイルランドでは豊穡な文学運動が開花し、それらの運動を称して「アイルランド文学ルネサンス」もしくは「アイルランド文芸復興運動」などと呼ばれている。ジョイスはこうした自国の狭隘な文学に反発し、大陸のモダニズムの運動に共鳴したとされるが、その文学観の形成の源泉は、何よりも同時代のアイルランドにあったと思われる。当時の文学状況を詳細に検証し、ジョイスの創作への具体的な関連を探りたい。扱うのはムア、イエイツ、シング、グレゴリーといった著名な作家のみならず、キャサリン・タイナン、エグリントン、ジョージ・ラッセル、エドワード・マーチン、アリス・ミリガンといった知名度は低いがそれなりに重要な人物も取りあげることにはしたい。

もう少し具体的に述べるなら、以下の3点に焦点を向けたいと思う。まず、アイルランド文学ルネサンスという呼称で一括されることが多いが、この運動に連なる作家たちも、お互いに文学観を異にし、ジョイスの反応も異なっていたはずである。したがって、表面的な敵対があったにせよ、ジョイスの創作の地下水脈としてすくいあげられる作家も多いのではなかろうか⁽⁴⁾。また、ジョイスの作品における、モダニズムという大陸からの影響と思える部分も、当時の文献をひもとくとき、その文学観のかなりの部分が、アイルランド文学ルネサンスの作家たちと共通していると思われる。ジョイスへの影響を再検討すべきである⁽⁵⁾。さらに、アイルランドの文学研究における対立図式、とりわけイエイツとジョイスの評価をめぐるも、具体的な根拠を欠く「大きな物語」であり、プロテスタント教徒とカトリック教徒の対立を前提とした予定調和的な文学史観によるところが大であると言える⁽⁶⁾。そのため、最初にアイルランドの歴史を通史的に俯瞰し、いささかの指針を導くことにする。次に、アイルランド文学ルネサンスとは何であったのか、当時の主要な作家の作品に即して詳しく考察したい。そして最後に、アイルランド文学ルネサンス終息以降の状況、とりわけ今日の文化論争に目を向け、アイルランド文学ルネ

サンスの役割を再検討するつもりである。

序 — 小さな島国から大帝国まで

アイルランドは小さな島国であるが、その民族の歴史を語ろうとするなら、ことはアイルランド島にとどまらない。アイルランド民族はヨーロッパ大陸からの移住者であるケルト族に由来すると言われながらも、そこにはヴァイキング、ノルマン人、イギリス人、スペイン人、フランス人といった血も混じっている。さらに今日のアイルランドには、世界各地からの移住者が数多く流れ込んでいる。その一方で、アイルランドはこれまで世界に大量の移住者を送り出してきた。特に十九世紀半ばの大飢饉の折には、イギリスのみならず、オーストラリア、アメリカ、カナダといった国々に多くの人々が移り住んだ。アイルランド島の人口が570万人ほどであるとしても、アメリカだけでもその十倍ほどのアイルランド人がいる。アイルランド人は世界において一大帝国を形成しているのである。このように小さな島にも色々な歴史が刻まれている。時代を追いながら、今日のアイルランドを形成するに至る要因をたどることにしたい⁽⁷⁾。

イギリス支配の確立

アイルランドには古くから先住民が住んでいたらしいが、その直接の祖先は、紀元前六世紀ごろ、大陸から移り住んだケルト民族とされている。封建諸侯の割拠する状態が続きながらも、ダブリンの北35キロ余りのところの小高い丘、タラを戴冠の地として君臨する上王が誕生し、ゆるやかなながらも国家の統一は保たれた。当時の様子は今日に伝わる神話から推測できるし、タラはいまだにアイルランド人の精神地理学の中心をなしている。マーガレット・ミッチェルの小説『風と共に去りぬ』(1936)では、アメリカに移住した一家が故郷をしのび、自らの農場をタラと命名している。

キリスト教の伝播は五世紀ころとされている。聖パトリックが来島し、ケルト人の土着の宗教であるドルイド教からの改宗に力を尽くした。以降、各地に修道院が建てられ、大陸への布教も行われ、アイルランドはほどなく「聖人と賢人の島」と呼ばれる。『ケルズの書』などの豪華な写本、ハイ・クロスと呼ばれる高い十字架の遺跡などにも、そうしたキリスト教の発展がしのばれる。3月17日は聖パトリックの命日で、「セント・パトリック・デー」と呼ばれ、各地で華やかな祝典が催されている。

八世紀にはヴァイキングの侵攻を受ける。各地に残るラウンドタワーは、その見張り用の櫓であった。そして再三の攻撃にも屈することなく、島の統一は守られた。しかしその自治を侵したのがアングロ・ノルマン人の来島である。十二世紀後半のこと、アイルランドの内紛に乗じ、援軍という口実で到来し、イギリス支配の基礎を作った。内紛と言えは聞こえはいいが、実情は王妃ダーヴォーギラをめぐる夫と愛人との抗争とも言われ、十九世紀末のチャールズ・スチュアート・パーネルの密通事件と同様、アイルランド史の汚点とされている。民族主義の高揚期、レイディ・グレゴリーは『ダーヴォーギラ』(1907)で主人公の罪意識を問い、W.B. イェイツは『骨の夢』(1919)でアイルランド人のその後のト

ラウマを暴いている⁽⁸⁾。

アングロ・ノルマン人は、ヴァイキングの末裔で、1066年にイギリスを支配したノルマン人の子孫である。彼らは見事な戦略で、またたく間にアイルランドを制圧した。だが、その後にイギリスから渡ってきた支配者たちは、アイルランドの人々と同化し、アングロ・アイリッシュと言われた。そのことを危惧したのが、イギリスの国王ヘンリー八世であった。ヨーロッパ情勢を見すえ、イギリスの安定のために、後背地のアイルランドを支配下におくことが急務と思われたのだ。こうして1541年、彼はアイルランドの首長を宣言し、アイルランドの絶対的な服従を要求する。

イギリスの植民地化はそれ以降も進められた。何よりもエリザベス一世の支配は決定的であった。アイルランドに対するイギリス支配は、彼女のテューダー王朝の時代に確立したと言われている。1592年には、アイルランド支配の要塞である大学、トリニティ・コレッジも設立された。またスペインと謀ってイギリス支配に反抗したヒュー・オニールも、1603年に無条件降伏し、領地である北部のアルスターは没収され、アイルランド全土がイギリスの支配下に置かれることになった。ブライアン・フリールの『歴史を書くこと』(1988)は、その折のヒュー・オニールの心情を記した劇である⁽⁹⁾。

イギリスのアイルランド支配は、物理的なレベルにとどまらず、文化のレベルにまで及んでいた。早くもエドマンド・スペンサーは、小冊子『アイルランドの現状管見』(1598)において、アイルランド人が野蛮人であると語っている。叙事詩『神仙女王』の作者とも思えぬ発言であるが、彼のアイルランド人蔑視は、イギリス文化の卓越性を賛美するための便法であった。アイルランド人を「他者化」することによって、イギリス人としての自らの存在を定立しようとしたのである。その思想は「われわれ」と「かれら」という典型的な二項対立の思考様式に拠って立ち、イギリス人とアイルランド人を区別する、その後の論理の基礎をなす。

スペンサーと同様の思考様式は、シェイクスピアの『ヘンリー五世』(1599)を取り上げて明らかなだ。この劇はイギリスとフランスとの戦闘という体裁を取りながらも、実際は、シェイクスピアのパトロン、サウサンプトンのヒュー・オニール鎮圧のアイルランド遠征を念頭に描かれたと言われている。その軍隊はスコットランド人、ウェールズ人、アイルランド人、そしてイングランド人の混成部隊であるが、イングランド国王をすべての中心の君主と仰ぐ、統一国家という神話が浸透している。そしてその神話を支えたのが、イングランドの卓越性であった。各部隊の指導者はイングランド人であるし、正確な英語を話すのもイングランド人であった⁽¹⁰⁾。

傷つけられた女性としてのアイルランド

イギリス人とアイルランド人を差異化する指標は、文化と同時に宗教でもあった。イギリス国王ヘンリー八世は、結婚の都合によりローマ・カトリック教会を脱退し、1534年に独自の英国国教会を設立していた。アイルランド人がカトリック教徒、イギリス人が英国国教会教徒もしくはプロテスタント教徒と概括されるのはその結果である。この相違はクロムウェルのアイルランド遠征にも明らかである。彼はカトリック教徒を人間とは見做さず、1649年にアイルランドに遠征し、非道な虐殺を当然のこと

とした。1688年の「名誉革命」も同じく宗教上の対立による。カトリック教徒の国王ジェイムズ二世から、プロテスタント教徒の国王オレンジ公ウィリアム三世に権力が平和裡に委譲され、一般的には記念されるべき出来事と讃えられている。だが両者はアイルランドで争うこととなる。そのうちでも有名なのが、1690年のボイン川の戦いで、ウィリアム側が勝利し、ジェイムズ軍はカトリック教国のフランスへ亡命することとなった。今日でも、北アイルランドでは、プロテスタント教徒たちがこの勝利を記念し、毎年7月12日、「オレンジの祭り」を祝っている。

ボイン川の敗北を契機として、カトリック教徒側はイギリスから様々な弾圧を受けることとなる。いわゆる「カトリック刑罰法」の施行で、カトリック教徒に対して多くの制限が課された。聖職者になるには大陸で学ばなければならず、子弟たちの教育は当局の目を盗みながら寺子屋で施された。また世襲の財産もカトリック教徒であるかぎり相続が認められず、公職につくことも許されなかった。さらに五ポンド以上の馬は所持できず、アイルランド風の服装も禁止された。英国国教会への十分の一税の支払いを要求されたばかりか、その他の課税もあった。こうして十八世紀初頭には、カトリック教徒の所有する土地は10%近くにまで低下していた⁽¹⁾。

ジョナサン・スウィフトは、そのようなアイルランドの状況を早くも「傷つけられた女性の話」(1707)に仕立てあげ、イギリスの搾取を非難した。アイルランドとイギリスの関係は、「親族」という比喻を用いて語られることが多く、イギリスが男性、アイルランドが女性として表象された。したがって、物語では女性が男性の横暴を縷々と明らかにする設定になっている。風刺小説『ガリヴァー旅行記』(1726)の作者として知られる毒舌家のスウィフトも、アイルランドの状況には心痛めるところがあったのだろう、「傷つけられた女性の話」を含め、アイルランド擁護の冊子をいくつか書いている。「つつましい提案」(1729)もその一つである。彼はアイルランドの貧困を憂え、その子供をイギリス人(ジョン・ブル)の食料として供するなら、牛肉を食するイギリスばかりか、子沢山のアイルランドも益するところ大であると論じた。

そのような状況下、アイルランドのプロテスタント教徒たちをも目覚めさせる事件が勃発した。1776年のアメリカ独立戦争と1789年のフランス革命である。アメリカの独立戦争は同じイギリスの体制内にあるアイルランドに衝撃を与え、自由と平等を合言葉とするフランス革命はアイルランドの独立への期待を高めた。アイルランドには、イギリス当局の出先機関としての総督府があり、その庇護の下に支配者階級である少数派のプロテスタント教徒がいた。スウィフトのように英国国教会の要職にあるものもいれば、アイルランド議会の議員として権力を容認されているものもいた。そしてこれらの人々は、支配者としての自らの特権を維持するため、イギリスの支配を受け入れてきた。だが、時代は変遷期にあり、アメリカとフランスの革命は彼らの認識をも揺るがすことになった。

こうしてアイルランドでも国家としての意識が高まった。そして国家独立のために、プロテスタント教徒とカトリック教徒の共闘の必要性が認識されるようになった。雄弁家として名高い政治家ヘンリー・グラタンは、独立国家としてのアイルランドを目指し、イギリス政府との交渉によりさまざまな制限の撤廃に取り組んだ。その一方で、急進派の政治家ウルフ・トーンらは、性急な独立を目指し、1798年

にフランスと謀って蜂起を起こした。時代の思想もアイルランドの独立の動きを支援していたのである。

しかしながら、グラタンの合法的な手段も、トーンの非合法の戦略も実を結ぶことはなかった。こうして1800年、アイルランド議会はイギリスとの連合を承認し、翌1801年にダブリンの議会はロンドンのウェストミンスター議会に併合される。アイルランド社会における少数派としての権利を守るというイギリスの甘言に、アイルランド議員は唆されたのである。その後のアイルランドは、自らが受諾したイギリスとの連合を撤廃することに力を注ぐことになる。そのため独立を獲得するまでに、アイルランドはさらに百年以上もの長きにわたる苦難の闘争が必要とされることとなった。そして「傷つけられた女性」は「黒髪のロザリー」⁽¹²⁾と名称を変え、アイルランドの苦悩を喚起した。

独立運動の高揚

手始めがカトリック教徒のダニエル・オコネルの奮闘であった。「解放者」と呼ばれているように、1829年、彼はイギリスにカトリック解放令を施行させることに成功した。ダブリンのメインストリート、オコネル通りは彼の名にちなむ。カトリック教徒に対するプロテスタント教徒の差別がいかにアイルランドの社会を歪めたかは、医師、弁護士、銀行員、技師、薬剤師という知的職業にたずさわる人々の比率を比較しただけでも明らかだ。そのほとんどがプロテスタント教徒に握られていたのである。カトリック解放令はそうした不均衡を打破する第一歩であった。

オコネルはさらに連合撤廃の運動を展開するが、アイルランド史上最大の悲劇が起こった。1845年から49年まで5年にわたり、いわゆるジャガイモの大飢饉が発生したのである。アイルランドはこれまでも飢饉を何度か経験していたが、この時の被害は社会構造そのものに変化をもたらした。百万人が死亡し、百万人が移住した。その結果、八百万人以上もいた人口も、5年で六百万人に減少する。そして移民はその後も恒常的に続き、50年後には四百万人へと半減する。この惨事は様々な要因の複合によるが、イギリスの無策によるところが大きく、アイルランド人はさらに反英感情を募らせた。大飢饉が国民の意識に与えた影響は根深く、その後、1980年代に至るまで、この悲劇を口にすることはタブーとなっていた⁽¹³⁾。

オコネルの死後、彼の影響を受けた「青年アイルランド党」と称するグループが、週刊誌『ネイション』を刊行し、民族主義運動に乗り出した。彼らはオコネルの連合撤廃協会から出発しながらも、彼の「老人アイルランド党」とは袂を分かった。オコネルがイギリス政府との交渉により打開策を見出そうとしたのに対し、このグループは自治権獲得のためには武力の行使も厭わなかったのである。実際、1848年に、彼らのうちでも過激な者たちが蜂起を起こしている。そしてこの蜂起に参加した者たちは、アメリカと連帯する強力な秘密結社「アイルランド共和兄弟団」(IRB)を結成し、1867年にも再び蜂起を試みることになる。

こうしたアイルランドの騒乱のため、イギリスではアイルランド人に対する蔑視が広まった。古くからステージ・アイリッシュマンやパディといった、紋切り型の蔑称が使用されていたが、1860年代以降、さらにヤフー、ゴリラ、チンパンジー、キャリバンなどというアイルランド人観ができあがってい

た。L. P. カーチスが『猿人と天使——ヴィクトリア朝の戯画に見るアイルランド人』(1971)で論じているように、『パンチ』などイギリスの雑誌に掲載されたアイルランド人は、事実、動物に近いきわめて粗暴な人物として描かれていた。このイメージは民族主義の高揚期、ダーウィニズムの浸透と相まって、イギリスの帝国主義を正当化することとなった⁽¹⁴⁾。

イギリスのこの姿勢は、批評家マシュー・アーノルドの『文化と無秩序』(1869)にも反映されている。国家を統一する装置としての文化とそれに抗する無秩序を論じたもので、イギリス国内の選挙権拡大を危惧したものである。労働者階級の知的レベルを憂え、教育の必要性を説いたのである。にもかかわらず、文化がイギリス、無秩序がアイルランドを指すことは疑いの余地がない。アーノルドはイギリスによるアイルランド支配を暗に容認しているのである。彼はアイルランド自治には反対の立場にあったのだ⁽¹⁵⁾。

そのような風潮にもかかわらず、イギリスの自由党党首グラッドストーンは、アイルランド問題の解決はアイルランド自治を法制化することにあると宣言し、国教会制度の廃止、小作人の権利を守る土地法、カトリック系の中等学校や大学への助成金といった問題に矢継ぎ早に取り組んだ。そのため、自治権獲得を目指すアイルランド議員たちの自治党は、グラッドストーンとの連帯により、その実現の機会をうかがった。アイルランド共和兄弟団の弁護をしたアイザック・バットは機会を捕らえることに失敗したが、折しもチャールズ・スチュアート・パーネルが彗星のごとく登場し、自治権獲得のために目覚ましい活躍をしたのである。

パーネルは1875年に国会議員になり、1879年から82年にかけての土地戦争のときには土地同盟の総裁として農民運動を指導し、その後は国民党党首としてアイルランド自治の運動を推進した。土地同盟はマイケル・ダヴィッドとともに始めた運動で、小作農を救助することを目的とした。「ボイコット」⁽¹⁶⁾のようなイギリス人の不在地主も多く、小作農は法外な地代に苦しんでいたのである。その一方で、パーネルは国民党を結集させ、議会妨害などの戦略を駆使したりしながら、グラッドストーンとも連帯し、アイルランドの自治権獲得に全力を尽すことにもなった。彼は国民に「無冠の帝王」と呼ばれ、明るい展望を与えていたのである。

にもかかわらず、1889年12月、パーネルの同僚オシー大尉が、彼の妻とパーネルのスキャンダルをめぐる、離婚訴訟を起した。そして翌年の11月に離婚判決が認められる。パーネルとオシー夫人との関係は10年近くも続いていた公然の秘密であったが、禁欲的なヴィクトリア朝の人々にとって、人妻との密通は相当なショックであり、一大センセーションが巻き起こったのである。そしてカトリック教会とグラッドストーンからの批難もあり、国民党は事態を鑑み、12月にパーネルを党首の座から追放した。パーネルは捲土重来を期したが、翌年には鬼籍の人となった。

パーネルの悲劇は当時の文学者たちの想像力を刺激した。特にW. B. イェイツやジェイムズ・ジョイスは、パーネルの死に救世主の死を重ね、その復活を渴望した。実際、パーネル亡き後のアイルランドは、舵取りを失った船のようなものであった。国民は方向を見出せず無力感に襲われていた⁽¹⁷⁾。

敗北の勝利

しかし、パーネル失脚後の政治的に空白なこの時期、「アイルランド文学ルネサンス」と呼ばれる黄金時代を迎える。アイルランド人のアイデンティティ確立の運動として始まり、言語、スポーツ、文学などを含め、イギリスとは異なるアイルランド独自の文化を模索することとなった。アイルランドの脱イギリス化の始まりである。そのうちでも目覚しいのが、W.B. イェイツ、ジョン・ミリントン・シング、レイディ・グレゴリーたちの演劇活動であった。彼らはプロテスタント教徒のイギリス系アイルランド人であったため、観客であるカトリック教徒の民族主義者との対立を招いたこともあるが、しかしその活動が民族主義運動に活力を与えたことは明らかな。イギリスにおいても、オスカー・ワイルドやバーナード・ショーが精力的に活躍していた⁽¹⁸⁾。

この時代のアイルランド事情を描いたものとして、たとえば、1902年に上演されたイェイツの劇『キャスリーン・ニ・フォーリハン』がある。民族主義者たちに最も影響力のあった作品で、多くの観客から喝采を博した。アイルランドの化身としての「貧しい老婆」が、フランス人と謀って、アイルランドをイギリス人の手から奪還するため、日々の物質生活に満足している農民を覚醒させる物語である。貧しい老婆が植民地支配で疲弊したアイルランドの化身であることは明らかなで、アイルランド独立のあかつきには美しい女王として復活するという設定である。この劇がその後のアイルランドの行く末に関わる事件である、復活祭蜂起を誘導したと言われている。

復活祭蜂起は、1916年4月24日、民族主義者のパトリック・ピアスを領袖とし、ダブリンのメインストリートに面した中央郵便局で開始された。そこに結集した武装勢力は、アイルランド共和国の独立宣言を布告し、イギリスに対し反逆を試みた。その数およそ二千名足らずで、蜂起と呼ぶにはずさんな行動であったが、その後のアイルランドを決定する歴史的な事件となった。これまでのすべての蜂起が無謀であったし、行動自体に変わりがあったわけではない。この時もイギリスは、第一次世界大戦に手をこまねきながら、一週間ほどでこの蜂起も鎮圧してしまった。異なっていたのは対応の仕方である。イギリス側は蜂起の指導者を裁判なしで処刑してしまったのである。その結果、指導者たちに対する国民の同情を煽り、彼らは英雄として神格化されることになったのである。

イェイツはこのときの驚きを「一九一六年復活祭」という詩に記し、「恐ろしい美が生まれる」というリフレインを繰り返した⁽¹⁹⁾。この蜂起に対する彼の立場は曖昧であるが、新しい時代が到来したことは確かである。蔑まれていたアイルランド人にも、解放のときがようやく到来したのである。1922年、北アイルランドが英連邦の一部として留まるのに対し、南は独自の自由国を成立させた。そして南の自由国は、1937年には新憲法を制定して国名をエールと改名、さらに1949年には英連邦から脱退しアイルランド共和国となった。しかし、プロテスタント教徒主流の北にもカトリック教徒がいるし、カトリック教徒主流の南にもプロテスタント教徒がおり、内部での抗争があった。今後の課題は、両宗派の間にもどのように折り合いをつけるかである。イギリスとの対立は国内での対立になる。

隠れたアイルランド

実のところ、1922年に自由国が成立したにもかかわらず、その後の30年余りの間、アイルランドに変化はみられない。イギリスの統治をそのまま受け継いだにすぎず、政治機構のみならず経済機構においても、ほとんど進展はなかった。アイルランドは、イギリスが推進した近代化に逆行するかのようになり、むしろ田園を賛美する保守主義を堅持した。ダニエル・コッカリーの『隠れたアイルランド』(1924)は、その象徴的な論考である。彼が説いたのはアイルランドに潜在する、イギリス文化とは異なるアイルランド独自の文化である。田園賛美は十九世紀末から、すでにアイルランド文学ルネサンスという運動において着目されていた。自由国成立はその問題を極限化しただけである⁽²⁰⁾。

その一方で、アイルランド人のアイデンティティをめぐる議論は、文学ルネサンスのころより党派色を帯び、その意味も限定されるようになっていた。デニス・モーランは、『アイルランド人のアイルランドの哲学』(1905)において、まさしくそうした展開を力説していた。彼は、アイルランドがイギリスから政治的にも、文化的にも、経済的にも完全な独立を達成し、自らの言語、慣習、文化を持つ自治の国家としての地位を獲得するよう語っていたのである。そのため「二つの文明の戦い」と題されたその最終章で、イギリス対アイルランドという二分法によって立ち、イギリスにまつわるあらゆるものを排除することを主張していた⁽²¹⁾。

モーランの説くアイルランドはゲール語国家であり、イギリス系アイルランド人作家はアイルランド国家の一員ではないとされた。そのためイエイツ、ハイド、グレゴリーたちは、事態の展開に居心地の悪さを感じ、新しい勢力とは一線を画することになる。イギリス系アイルランド人という、出自に折り合いを付けられなかったのである。一方でイギリスから解放された文学の創造を試みながら、他方でそのアイルランド性を否定されたのである。彼らの文学は政治との乖離を目指していたが、逆にアーサー・グリフィスやデニス・モーランたちカトリック教徒の民族主義者は、文学を政治運動に奉仕するべき手段と見做していた。1920年代はその確認から始まり、少数派のプロテスタント教徒は片隅に追いやられた。1923年にノーベル文学賞を受賞したイエイツもその一人である。

新国家の政策は、ゲール語を推進し、本来のアイルランドを取り戻すことにあった。そしてこの保守主義は、1929年に出版物検閲法を制定し、外部のメディアの不純な影響を遮断した。何よりもイギリスの文化は物質主義的であり、邪悪なものとして見做されていたのである。そのため、アイルランドは、世界の中の眠れる国となり、自給自足の政策を実践することとなる。世界の影響に対する抑止機構としてのこの検閲に批難の声があがったのは、1940年代以降のことで、国家としての存亡に関わる危機意識による。そして1960年代から大幅な改定が試みられることとなる。だが、検閲制度は自由国成立後のアイルランドにとり、必然的な流れであったろう。

この時代で特記すべき人物は、エーモン・デ・ヴァレラである。彼は復活蜂起に参加し、その後は政界の中心人物であり続けた。1932年以降、首相の座に20年以上もおさまり、1959年から73年まで大統領を務めた。独立後のアイルランドを形成したのは彼の政治姿勢であった。1943年のセント・パトリック・デーの声明では、物質文明を否定し、家族を中心とする田園的な国家を賛美した。また第二

次大戦中には中立国を堅持し、ドイツ降伏後、イギリスの首相ウィンストン・チャーチルがその非協力的な姿勢を批難したことに応戦し、アイルランドが長きにわたってイギリスの植民地であったことを想起させた。こうしてデ・ヴァレラは、ゲールの楽園と自由アイルランドという政策で、国民に催眠剤を投与した⁽²²⁾。

それでも、新国家の内部には陰鬱な影が漂っていた。そうした社会の様相は、文学にも映し出されている。1920年代には、劇作家ショーン・オケイシーが復活祭蜂起を脱神話化することによって批難され、プロテスタント教徒の作家たちはアイルランドにおける自らの空間の喪失を描いた⁽²³⁾。また1930年代には、ショーン・オフェイロンのようなカトリック教徒の小説家が、デ・ヴァレラの理想主義の裏に潜む現実に目を向け、窒息したような風土に漂う瀕死の状況を暴いてみせた。

同じくカトリック教徒のパトリック・キャヴァナの詩、『大いなる飢え』(1942)の主人公マガイアも、土地、母親、教会という三つの勢力に支配され、その生命力を枯渇されている。大飢饉の折の農村での絶望的な状況を描いたとされているが、その状況は創作時の1940年代の農村社会にもあてはまる。これまで農村はアイルランドのアイデンティティの原点と考えられてきたにもかかわらず、キャヴァナが描くところによると、そのイデオロギーはもはや破綻してしまっているというのが実情であった。

ちなみに、ジェイムズ・ジョイスの小説、『若い芸術家の肖像』(1916)は、そうした社会への展開にいち早く警鐘を鳴らした傑作である。主人公スティーヴン・ディーダラスは、二十世紀の初め、自らを取り巻くイデオロギーを民族、言語、カトリック教会という「三つの網」⁽²⁴⁾と評し、そこからの解放を求め、アイルランドから脱出する。彼の意識は、その後の文学者の手本となり、多くの「スティーヴン・ディーダラス」が誕生する。いまだそれらの網が人々を取り包んでいる証拠である。

多文化社会

アイルランドに変化が訪れるのは、1960年代のことである。この時代は世界的な変革期でもあった。アメリカでは、1963年にケネディ大統領が暗殺され、間もなくヴェトナム戦争の泥沼に突入する。日本でも、1964年に東京オリンピックを開催し、高度成長の道を歩み始める。さらに1968年には、プラハでビロード革命が、またフランスのセーヌ左岸でも反乱が起こった。対抗文化の時代の到来でもあり、その感情を歌で表現したのがビートルズである。そしてビートルズの祖国であるアイルランドにおいても、変貌の時代を迎えることとなったのである。女性作家エドナ・オブライエンの作品の背景にも、そうした変貌が描出されている⁽²⁵⁾。また1969年にはサミュエル・ベケットがノーベル文学賞を受賞している。

この変化はA.J.ハンフリーズの『新しいダブリンの市民——都市化とアイルランドの家族』(1966)にも明らかだ。ハンフリーズの分析する1960年代の新しいダブリンの市民は、イギリス文化を受け入れた現代的な都市の住人であり、多様な職業に携わっている。実際、アイルランドは1960年代に世界との連帯を強化することとなった。デ・ヴァレラの後を継いだショーン・レマスが、1959年、経済政策の巧みな転換をはかったのである。さらに1973年、アイルランドはイギリスともどもECに加盟し、

ヨーロッパとの協調路線を受け入れた。こうして停滞していた経済も向上し、価値観の変化もほどなく訪れる。ゲール語を中心とする教育に対する改革の必要性が説かれ、宗教についての率直な意見が交わされ、女性たちが権利を主張した。その背景には、都市化や婚姻率の上昇とあいまった、消費社会の到来がある。

この変化は文化革命とも呼ばれる。にもかかわらず、アイルランドは国際市場に自らをさらし、物質文明と旧来の価値観との均衡が破られ、分裂症的な兆候を呈することも一時期あった。言語問題を取り上げても明らかだ。ゲール語はアイルランド人のアイデンティティの通行証であるが、他の文化から見れば私的言語のようなものである。観光産業や外国企業にとっては、日常的に使用している英語の方がはるかに有利である。ゲール語が民族の魂の拠り所であるにせよ、経済発展のためには、言語喪失の危機も無理からぬことであった。こうして理念と実際との間にギャップが起り始め、アイルランド人のアイデンティティをめぐる議論がまたしても再燃することになる。

北アイルランド問題が浮上するのも60年代のことであった。北アイルランドは1920年のアイルランド憲法により南から分離し、1922年の自由国成立に際してはイギリスの一部にとどまった。そのためプロテスタント教徒主流の北において、カトリック教徒はこれまで差別的な待遇に忍従してきた。だが、彼らもアメリカの黒人たちの公民権運動に倣い、1967年に公民権協会を設立することとなる。その結果、二つの宗派は、それぞれ独自の武装組織を結成し、武力衝突が起こった。プロテスタント教徒側は「ユニオニスト」もしくは「ロイヤリスト」と称し、カトリック教徒側は「ナショナルリスト」もしくは「リパブリカン」と名乗った。こうして1972年、血の日曜日事件が起こった。そしてこの事件を契機にイギリスは北アイルランド政府を廃止し、直接統治を行なうこととなる⁽²⁶⁾。

北アイルランド情勢は、北だけの問題だけでなく、南のアイルランド共和国やイギリスの問題でもある。そのために両政府は、1985年にアングロ・アイリッシュ協定を取り付け、政府間協議によって北の問題の解決を目指そうとした。そして1990年代に入り、北アイルランドのプロテスタント教徒とカトリック教徒双方の意見を斟酌しながら、和平へのプロセスの合意案を発表した。それによると、両政府は北アイルランドの住民の意向にしたがい、和平のための政治的枠組を築くことを目標とすることになる。さらに1998年には、アイルランドの首相、イギリスの首相、北アイルランドの八つの政党との間でベルファスト合意という、三者の和平合意が成立し、テロの終息に期待が寄せられた⁽²⁷⁾。

南北問題は歴史認識をめぐる論争でもある。そのため1970年代には、慢性的な幻想に対する修正主義が唱えられた。それは1916年の復活祭蜂起をめぐる論争でもある。アイルランド共和国は、独立の直接の事件となった復活祭蜂起の指導者、パトリック・ピアスを英雄として顕彰してきた。修正主義はそのイデオロギーに疑義を突きつけるものであった。極言するなら、復活祭蜂起がなくても今日のアイルランドは形成されたであろうし、ピアスの行為は民族主義という信仰を作り上げ、憎悪という福音書を生み出したただけであったと論じられた。修正主義とは、圧制者に対して暴力で立ち向かった少数者だけが神聖視されるという、いわゆる「大きな物語」の国家観への嫌悪感に端を発している。

こうして1980年代を迎える。この時代は不確実な時代とも呼ばれ、経済、離婚、中絶などをめぐる

変革への様々な試みがなされた。いずれも実を結ぶことなく時が流れたが、1990年にメアリー・ロビンソン、さらに1997年にメアリー・マカリースという具合に女性の大統領が誕生し、経済も好転、未曾有の繁栄の時代を迎える。移民した人々の帰国がめざましかっただけでなく、世界から流入する移民が相つぎ、多文化社会を形成することになった。新しい時代の到来である。かつての対立を克服する思想も持たぬままの事態の変転である。シェイマス・ヒーニーのノーベル文学賞の受賞も、1995年のことであった⁽²⁸⁾。

そして2007年5月、北アイルランド政府がようやく樹立され、アイルランドに悲願の和平が訪れた。闘争の歴史に終止符が打たれ、今後のアイルランドの展望が論じられることになったのである。そうした議論のうちでも大きな問題は、「アイルランド人のアイデンティティ」に関わっている。これまでの思考様式からの脱却も果たせないまま、多文化社会による波を無視し、希薄なアイデンティティに固執し続けるかもしれない。それともアイルランドをヨーロッパに置き換え、ポストナショナリズムという響きのよい言葉にアイデンティティを模索する可能性もある⁽²⁹⁾。

悪夢としての歴史

こうしたアイルランド史を眺めるとき、大ざっぱながら、イギリスの植民地支配下におかれた「悪夢の歴史」と概括できるかもしれない。蜂起も繰り返されたがいずれも失敗し、アイルランド人は百敗の民とも呼ばれている。ダニエル・オコネルによるカトリック解放令の獲得のような晴れがましい記録もあったし、パーネルのように歴史に貢献した人物も数多いが、大方の出来事は悲惨な影に覆われている。にもかかわらず、いまだ1916年の復活祭蜂起が神話化されたまま、アイルランド国民に祝祭されていたのだ。この事実をどう受け止めるべきなのか。イギリスは第一次大戦が終了した暁には、アイルランドの独立を承認すると約束していたのである。そんななかでの蜂起は極めて無謀であったし、無益であったと言っても過ぎることはない。大方のダブリン市民にとり迷惑な出来事であったし、英国との関係を悪化させ、さらには内紛の契機であったかもしれない。

アイルランド国民のアイデンティティが復活祭蜂起を中心に形成されていることは事実である。そしてアイデンティティの形成に力があつたのはアイルランド文学ルネサンスであったことに間違いはない。その一方で、ほとんどの著名な文学者が国籍離脱者となっている。国家に背を向けながらアイルランドについて書いていたとも言える。芸術家と国家の相克があつたのかもしれない。そうであれば、アイルランド文学ルネサンスとは何であったのか、その意義を再検討しておく必要があるだろう。おそらく修正主義が主要なテーマとなるであろうが、問題は現代の文化闘争におけるその真偽でもあるだろう。

* 科研：研究課題番号 23520331

注

- (1) 拙著『ジョイスを読む』（集英社、2004）を参照。1941年のジョイスのチューリヒでの死を悼んだアイルラ

- ンド人もいたが、彼がアイルランド人作家として承認されるのは、生誕百年祭の1982年のことである。その一方、W. B. イェイツをアイルランド人作家として承認しない向きもある。
- (2) 『フィネガンズ・ウェイク』には先行の自作へのコメントも含まれている。ジョーゼフ・ケリーの論考はいずれ再考する必要がある。
 - (3) Richard Ellmann の伝記 *James Joyce* (New York: Oxford University Press, 1982) の欠落部でもある。
 - (4) たとえば、イェイツの『キャスリーン・ニ・フーリハン』とシングの『海に駆りゆく者たち』を比べてみるなら、その相違は明らかである。前者は名誉の「死」を肯定し、後者は不条理な「生」への忍従を語っている。
 - (5) アイルランドの文学者をモダニズムの視点で語ることは少ないが、語るにしてもその範囲を限定する傾向にある。Emer Nolan, *James Joyce and Nationalism* (London: Routledge, 1995) を参照。なお、ジョイスとイブセンとの関係が強調されるが、アイルランド文学ルネサンスの作家のほとんどがイブセンを取り込んでいた事実もある。さらに、ニーチェ、ワーグナー、ハウプトマン、チェホフなど、当時の大陸の思想、音楽、文学がすでに咀嚼されていたのである。フランスのエドゥアール・デュジャルダンを起源とするジョイスの内的独白の手法にしても、ジョージ・ムア経由であっただろう。
 - (6) Seamus Dean, *A Short History of Irish Literature* (Indiana: University of Notre Dame Press, 1994) を参照。カトリック教徒側とプロテスタント教徒側の代表は、Declan Kiberd と Edona Langley であり、両者の代表作としては *Inventing Ireland* (London: Jonathan Cape, 1995) と *The Living Stream* (Newcastle: Bloodaxe Books, 1994) を参照。
 - (7) 以下の現代史についての論述においては、Terence Brown, *Ireland: A Social and Cultural History 1922-2002* (London: Fontana, 2002) と F. L. S. Lyons, *Ireland since the Famine* (London: Fontana Press, 1967) も参照。古代史については松岡利次『アイルランドの文学精神——7世紀から20世紀まで』(岩波書店, 2007) を参照。
 - (8) レイディ・グレゴリーや W. B. イェイツの劇には、イギリス系アイルランド人としての遠慮があると思われる。
 - (9) ブライアン・フリールの目的は、イギリスの植民地支配の問題よりも、むしろアイルランド人が「大きな物語」としての歴史に石化されることへの抵抗を示すことにある。
 - (10) Cairns, David, and Shaun Richards, *Writing Ireland: Colonialism, Nationalism and Culture* (Manchester: Manchester University Press, 1988) を参照。
 - (11) 具体的な作品としては Maria Edgeworth, *Castle Rackrent* (1800) を参照。
 - (12) 「黒髪のロザリー」はジェイムズ・フラレンス・マンガンによるゲール語からの翻案。スペインと共謀してイギリス支配を覆そうとする詩である。タイトルはアイルランドを表象する女性。
 - (13) 確かに大飢饉の惨状を描いた作品は少ないが、皆無であったわけではない。むしろこの惨事を解明する資金が不足していたというのが実情である。
 - (14) 人種論的な見地からの論考は Vincent J. Chen, *Joyce, Race and Empire* (Cambridge: Cambridge University Press, 1992) を参照。
 - (15) F. S. L. Lyons はアーノルドに対抗して、*Culture and Anarchy in Ireland 1890-1939* (Oxford: Oxford University Press, 1982) において、一次元的な文化よりも、ポリフォニーこそアイルランドの特性とした。
 - (16) 「ボイコット」は人名。ボイコット運動は彼の名にちなむ。
 - (17) パーネルに対する文学者の哀惜については、Herbert Howarth, *The Irish Writers 1880-1940: Literature under Parnell's Star* (London: Rockliff, 1958) を参照。
 - (18) アイルランドには文壇がなく、アイルランド文学の拠点はイギリスであった。イギリスにおもねるアイルランド人文学者を評して“court jester”と呼ぶことがある。
 - (19) W. B. イェイツの復活祭蜂起に対する立場は曖昧であるのは、「恐ろしい美」(terrible beauty) という撞着語法にも明らかだ。
 - (20) 閉塞的な社会ということで言えば、反ユダヤ主義が苛烈になるのは自由国成立後である。
 - (21) イギリス文化への対抗は、Douglas Hyde の“The Necessity of De-Anglicization of Ireland” (1892) よ

り始まる。脱亜入欧を目ざす日本も揶揄の対象であった。

- (22) ジェイムズ・ジョイスの『若い芸術家の肖像』が入手できたとして、読むことは恥辱とされた。
- (23) 復活祭蜂起を脱神話化したのがオケーシーであるが、その後も「修正主義」という名の下、文化論争が続いている。
- (24) James Joyce, *A Portrait of the Artist as a Young Man* (London: Jonathan Cape, 1916) の言葉。
- (25) Edona O'Brien, *The Country Girls Trilogy and Epilogue* (London: Jonathan Cape, 1967) を参照。
- (26) 「血の日曜日事件」はイギリスの策謀とされてきたが、2011年に入り、イギリスがようやく謝罪した。
- (27) 英国の首相のブレアがアイルランド系であることが功を奏した。
- (28) ヒーニーが南のアイルランド共和国へ「亡命」した事実を考えるなら、1990年代の北アイルランドの和平は脆弱であった。
- (29) アイルランドのアイデンティティはアイルランドの最後のポンド紙幣に表象されている。ジョイスが描かれた表は自国の言語のゲール語、裏は多言語によって構想されている『フィネガンズ・ウェイク』からの引用。独自の国家のアイデンティティを保持しながら、EUの加盟国としての立場も意識したものである。しかしながら、日常生活においてゲール語が使用されることはほとんどない。多文化社会でのアイデンティティの行方は不透明である。